

# 特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

## 〔2年次〕

大分県教育センター特別支援教育部

指導主事 伊達 洋介

### I 前年度の研究結果から

昨年度、特別支援学校における主体的・対話的で深い学びについて、県内の特別支援学校で実際にどのように実践が行われているのか現状と課題について調査を行った。管理職と各学部主事を対象にアンケート調査を行うことで、以下のことが明らかになった。

- ・「主体的・対話的で深い学びについて、学校として具体的な取組があまりできていない」という回答が75%であった。(管理職回答)
- ・「深い学び」が「できていない」、「あまりできていない」の回答が60%であった(学部主事回答)
- ・「対話的な学び」で、「できている」の回答が小学部は0件で、高等部は8件であった。(学部主事回答)
- ・学校種(障がい種別)で見ると、病弱・肢体不自由学校において「多様な手段で伝える」を課題に挙げる回答が多かった。
- ・「授業実践の様子」では、30事例中15事例が生活単元学習で、教科別の指導は7事例であった。

上記のことから、①「深い学びの実現」、②「教科別の指導実践の充実」、③「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」が必須の取組であると考えられた。そこで今年度は、県立特別支援学校2校に協力を依頼し、ステップアップ研修Ⅱの「教科の特性に応じた『見方・考え方』を働かせることを意図した授業実践等」の受講者である採用3年目の教員に、主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れた授業実践を行ってもらい、その実践例を集積することとした。

### II 授業実践に向けて

A校2名、B校3名の教員に趣旨説明を行い、事前に授業に向けて電話やメールでのやり取りを行いながら授業構成を行った。1度目の提案授業後に助言を行い、アンケートを通して各自振り返りを行い、2回目の授業に取り組んだ。

今回は5名の中から①～③の3つの課題に沿った2事例を紹介する。

### III 研究の実際

#### 1. A校の実践 (小学部 単一障がい 3年生 算数)

(1) 題材名 右と左の言葉を使って、方向を指差したり、ものの位置を表したりしよう

(2) 題材目標 (知・技)身の回りのものについての方向を表す言葉(左右)を知り、その言葉を使って、ものの方向を言い表すことができる。

(思・判・表)右と左の言葉を使って、友達にものの方向を教えることができる。

(学・人)方向を伝える活動に興味を持ち、進んで友達へ伝えようとしたり、友達からの言葉を聞いて動いたりする。

## 大分県教育センター特別支援教育部

- (3) 本時のめあて 友達からの指示を聞いたときに、基準となるものの場所から左右のどの方向に置いたらよいかのかわかり、正しい場所にピースを置くことができる。

## (4) 展開

学習活動	○教師の支援 ・指導上の留意点
1. 挨拶をして、本時の内容を知る。	○授業の始まりが意識づけられるように、号令係を促す言葉がけをしたり、本時の活動内容を板書 (①おはなし②○○③おはなし) したりする。
2. めあてとパズル課題を知る。	<p>○活動に興味を持つことができるように、サンタクロースからの手紙(校内の何処かにプレゼントを置いてきたという内容)を代読する。</p> <p>・「どこにあるの？」等と、プレゼントの場所を尋ねてくるときは、教師は場所を知らないことを伝え、何があったらプレゼントの場所がわかるかを問うようにする。</p> <p>○プレゼントの場所が示されたヒントパズルを提示し、この時間に頑張ることとしてのめあてを示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">       A児めあて：みぎ・ひだりを きいて、 パズルを かんせいさせよう！     </div> <p>○パズルをするときの約束を提示する。 やくそく①ふたりで きょうりょくする。 ②きいてから うごく。</p> <p>○パズル課題の前に左右の確認をするため、「右(左)手あげて」と言葉がけをする。</p> <p>・方向が分からないときは、視覚支援ツールを提示し、見てわかるようにする。</p>
3. パズルゲームをする。 (評価場面 *全8試行)	<p>○パズルの仕方を提示し、2人組に分かれて課題1のパズルを取り組む。(1回目)</p> <p>・ピースを置くときに悩むときは、視覚支援ツールを使ってよいことを伝えたり、「右手はどっちかな」等と言葉がけをしたりする。</p> <p>・それでも悩むときは、視覚支援ツールを使い、「○○の右だから…」等と視覚的に伝えるようにする。</p> <p>・ピースの置く場所が間違っていたときは、誰かが気づくまでは伝えないようにする。気づいた時点でやり直しをしてもよいことを伝える。</p> <p>○完成したら全員でパズルに示されたヒントを読み、A児がプレゼントの在処を探しに行く。</p> <p>・場所がわからないときは、視覚支援ツールを使って探すように伝える。</p> <p>○2回目のパズルゲームに取り組む(※1回目と同様に支援)。完成したら、D児にプレゼントを探しに行ってもらい、全員でプレゼントの中身を確認する。</p>
4. まとめをして、順番に振り返りをする。	<p>○プレゼントを一度回収し、全員にめあてについてできたかどうかを尋ねる。</p> <p>・「できた」と言うときは、教師が指示した方向を指差すように伝え、方向を理解できたか確認をする。</p> <p>○上下左右についてのまとめ(自分から見ての右左の方向を確認)をする。</p> <p>・自分から見た方向を意識できるように、<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">みぎ</span>・<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ひだり</span>と記されたシールを手の平に貼り、自分から見た方向と他者と向かいあったときの方向の違いに気付くことができるようにする。</p> <p>○振り返りを一人ずつ行う。</p> <p>・発表の仕方の見通しが持てるように、今日の学習でわかったことや、何ができたのかを尋ねるようにする。</p>

## 特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

## (5) 授業後のアンケート（授業者）

問1 主体的な学びをどのように取り入れましたか

- ・児童にとって得意な活動や好きな活動を中心に課題を設定した。
- ・机上での学習だけでなく、動きのある活動を取り入れ、興味関心を高めるようにした。

問2 対話的な学びをどのように取り入れましたか

- ・児童同士で課題について話すことができる時間を増やすために、毎時間ペア活動を入れた。
- ・ゲーム性のある活動が中心になると、教科についての話から脱線する可能性がある一方で、適宜教師が問いを投げかけ、課題についての話が継続できるようにした。

問3 深い学びをどのように見取りましたか

- ・授業の中だけでなく、教室の中にある物の位置や方向を言い表す活動や、遊びの指導などで意図的に方向を意識するようにしたことで、日常への汎化ができるようにした。

問4 主体的・対話的で深い学びの視点を入れた授業実践はできましたか

- ・児童がわくわくできるような課題設定をしつつも、ゲームに興味を偏りすぎないように算数での課題の明確化を意識した。児童同士が主題に沿って話ができるよう、環境設定や内容を改善した。学んだことを汎化できるように、教師が意識的に方向の言葉を使うようにし、学習したことを活用できる機会を増やすようにした。

## (6) A校での実践の総括

1回目の授業では、児童が筆箱で遊ぶ時間が長く見られた。児童同士の対話や教材を通して子どもが自己内対話をする場面があまり見られなかった。そこで、どのような姿が主体的な学びをしている姿で、そのための課題設定を再検討すること、また教材との自己内対話や児童同士の対話的な活動の充実を意図的に設定することを助言した。2回目の授業では、ゲーム性を高めたことで対象児の興味・関心に沿った授業構成となった。また、ペア活動を授業の中心とする授業構成にしたことで、対話を通して協力して答えを導き出そうとする姿が多く見られた。意図的に本題材での学びを日頃の生活や他の学習で意識させることで、学んだことが日頃の生活でも生かすことができるという充実感を味わえたことが深い学びにつながっていた。ゲームに興味を偏りすぎないように、教科指導の本質を踏まえ、算数の見方・考え方を重視した学習展開にすることで、深い学びにつながった。

## 2. B校での実践（中学部 重複障がい 2年 自立活動）

(1) 題材名 視線入力を使って気持ちを伝えよう

(2) 題材目標 (知・技) 視線を動かして、視線入力機器を操作する。

(思・判・表) 視線を動かしながら、正しい選択肢を選んで相手に伝えることができる。

(学・人) 自ら顔を上げ、伝えたい内容を選ぼうとすることができる。

(3) 本時のめあて スライドの写真やイラストを見て、自分が伝えたい内容に合った写真やイラストを、視線を動かしながら選び、朝の会を進めることができる。

(4) 展開

## 大分県教育センター特別支援教育部

学習活動	○教師の支援 ・配慮事項
1. はじめのあいさつをして学習内容を確認する。	○授業が始まることを伝え、はじめの挨拶をする。 ○本時の内容とめあてを、ホワイトボードを使って確認する。 ・活動に使う教材の写真等を使って提示する。 ・活動の中で特にめあてとなる活動の横に頑張るカードを張り付ける。
2. 体をほぐすためのストレッチを行う。(仰臥位)	○マットに降り、緊張をほぐすためにストレッチを行う。 ・枕等を使いながら体に負担のないようにする。 ・体を動かす部分は事前に触りながら動かすことを伝え、けがにつながらないようにする。 ・体の部分ごとに力が抜けた場合、力の抜けている箇所を伝え、賞賛する。
3. 視線を動かす練習をする。	○視線入力機器を使った選択の仕方を確認するために、4枚～8枚の写真から視線を向ける人物を伝える。 ・興味のある、好きな先生の写真を使用する。 ・教師が伝えた人物に視線が行かない場合、指差しをしながら視線を向ける場所を伝える。 ・正確に視線を向けることができた場合、正確に見ることができたことを賞賛する。
4. 視線入力を使って朝の会の練習を行う。	○視線入力装置を使って、朝の会の司会を行う。 ・視線入力装置で選んだ内容を聞いて、教師が行動をするようにする。 ・『健康観察』『朝の歌』『先生の話』は内容を対象生徒本人が選べるようにする。 ・本人が選んだ内容を教師が声に出して伝え、選びたい内容であったか確認する。 ・伝えたい内容とは違う選択をした場合、画面を戻り、写真やイラストの確認をした後に選びなおせるようにする。 ・伝えたい内容を選択できた場合、内容に沿って教師が行動をし、会を進め、会が進行できたことを賞賛する。
5. 視線入力を使って教師と会話をする。	○自分のタイミングで視線入力機器を使って教師に声をかけ、気持ちを伝える。 ・選択した内容が、伝えたい内容であるかを確認しながら会話をする。 ・伝えたい内容を正確に伝えられた場合、伝わったことを称賛し、選択した内容について会話を続ける。 ・伝えたい内容を伝えられなかった場合、スライドの写真・イラストを、教師が指さしと言葉かけで確認しながら本人が選びたい内容の写真・イラストを伝える。
6. 振り返りをして、終わりの挨拶をする。	○本時のめあてを再度確認し、頑張ったことを褒め、まとめを行う。 ・本時の学習で用いた教材を提示しながら、頑張ったことを褒める。

## 特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

## (5) 授業後のアンケート（授業者）

問1 主体的な学びをどのように取り入れましたか

- ・本人が選択できる場面を増やし、本人が選んだものをすぐに実行するようにした。

問2 対話的な学びをどのように取り入れましたか

- ・選択肢の中に、選びたいものがない場合は、次のページといった選択肢を増やし、「話したい」、「困っている」など何を伝えたいかを正確に伝えることができるようにした。

問3 深い学びをどのように見取りましたか

- ・今まで伝わりにくかったことが、視線入力を用いて伝えることができたということを実感し、次もやってみようと思えることがこの学習の深い学びだと思う。

問4 主体的・対話的で深い学びの視点を入れた授業実践はできましたか

- ・授業中にお茶を飲むことがなかった生徒が、視線入力を用いることで、「お茶を飲みたい」と選ぶことができ、お茶を飲むことで笑顔が見られた。伝わったことを実感し、視線入力を用いた会話を「もっとやりたい」と伝えてくれたことから、深い学びにつながる授業実践はできたのかなと感じている。

## (6) B校での実践の総括

日頃から教師の問いかけに表情や顔の動きで「はい」か「いいえ」を選択しており比較的表出のある生徒であった。視線入力を用いた授業を行っていたが、選択する場面が少なく、日頃のやりとり以上の表出が見られなかった。生徒自身が視線入力の価値性・必要性を感じられていない様子であったので、選択肢を増やす、選びたいものがない場合には次のページを選ぶようにする、本当にその選択で合っているのか確認できるようにするとよいのではと助言を行った。2回目の授業では、選択肢を増やし、次のページという選択肢も設定したことで、それまでは判断しにくかった生徒の表出を受け止めることができる場面が見られた。今まで以上に選択ができ、「お茶を飲みたい」という表出に教師が気づいたことで、生徒にとっては思いを伝えるために視線入力を用いることの価値を見いだしていた。また、できる喜びを感じ、「もっとやりたい」と伝えるなど、次への学習の意欲が高まっている様子が見られ、深い学びにつながった。

## IV 成果と課題

昨年度の研究結果から、特別支援学校における主体的・対話的で深い学びについての課題を明確にし、そこから協力校で授業実践を行う中で、A校では①と②の課題に沿った実践を行うことができた。また、B校では①と③の課題に沿った実践を行うことができた。

本来であればもう少し多くの事例を集積する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学校訪問の回数を当初の想定より減らした。そこで2年研究を3年研究に変更し、各学部の事例や障がいの状態に応じた事例等、より多くの事例を集積していきたい。そのため、来年度もステップアップ研修Ⅱで授業実践を行う採用3年目の教員を対象に、担当している児童生徒の実態を考慮し、協力校を選定・依頼し、授業実践を行い、更に事例を集積し、共有化できるようにしていきたい。